

熊本大学工学部 正員 三 池 虎 次
同 上 正員 ○小 林 一 郎

1. 要旨 無次元数を用いた、剛結構造の最適設計の定式化を試みたものである。

2. 剛結構造に現われる無次元数と最適設計 流体力学における Reynolds 数とか Froude 数のような、適切な無次元数は、弾性力学においても存在する。密度 ρ , 長さ l , 断面積 A , 速度 U , 分布荷重 p の特性値 $E, \rho, l_0, A_0, U_0, p_0$ のように添字 0 をもち、変位 u の無次元数 u^* の一般的表現は $u^* = (p_0 U_0^2 / \rho_0) (u / l_0)$ である。ここに $(p_0 U_0^2) / \rho_0$ は、いわゆる Euler 数であって、弾性体の場合には、応力 σ の無次元数は σ / p_0 となるように、速度の特性値として、 $U_0 = \sqrt{E_0 / \rho_0}$ を用いるべきで、 $u^* = (E_0 / p_0) (u / l_0)$ を得る。 E_0 はヤング率の特性値である。骨組構造においては、上記無次元数も成分とする変位、応力の無次元ベクトル d^*, σ^* , 集中外力 P の特性値 P_0 に対する比 P / P_0 を要素とする外力の無次元ベクトル P^* とするとき、無次元平衡方程式が $P^* = K^* d^*$ であるような、無次元剛性マトリックス K^* は、長さ比 $k_l = l / l_0$, 断面積比 $k_A = A / A_0$, ヤング率比 $k_E = E / E_0$, ポアソン比 ν , 変換マトリックス T 及び細長比 $\lambda = A l^2 / I$ で構成されることになる。 I は断面二次モーメントである。また、部材の曲げモーメントによる繰応力 σ_m の無次元数 σ_m^* は P_0 として部材の重量 $w_0 A_0 l_0$ (w_0 は部材単位重量) とすれば、 $\sigma_m^* = \sigma_m / w_0 l_0$ より

$$\sigma_m^* = \frac{1}{k_A} \frac{1}{k_l} \lambda \cdot C_F \cdot M^* \quad (1)$$

となる。骨組がトラス構造の場合は、 σ_m は曲げモーメントによる二次応力で、 C_F は部材断面の中立軸よりの線距離 $h/2$ と回転半径 r の比で、 $C_F = h/2r$, $r = \sqrt{I/A}$ である。この C_F は断面特有の値であって、箱形断面の場合 $C_F = 1.73$ で、角形や工形断面では、この値は 1.73 より小さい値をとる。

ところで、骨組部材の許容圧縮応力は、骨組部材では座底条件に支配され、厳密には軸げと軸力が同時に作用する場合の座底条件式を用いるべきであるが、示す書では、曲げによる二次応力が小さいとして、単純に軸力が作用する場合の式を用いる。従って、この式を制約条件に用いる場合には、曲げモーメントによる二次応力が小さいという条件の設定が必要で、トラスの二次応力に対する制限 $h/l \leq 1/10$ 、(したがって、細長比 λ の下限 $20 C_F \leq \lambda$ が設定されることになる。 C_F の値を与えて、 A, λ が最適設計の解として得られた後、たとえば箱形断面では、幅 b を選定して、板厚 t_1, t_2 を定めることになる。

3. 剛結トラスの最適設計 目的関数 Z は最小重量設計に従うものとする

$$Z = w_0 A_0 l_0 \left\{ 1 + \sum_{ij} k_{axij} \cdot k_{axij} \cdot k_{exij} \right\} \quad (2)$$

で与えられ、制約条件は

$$\sigma_{ax} \leq w_0 (b/l) L \cdot \sigma_{ij}^* \leq \sigma_{ta} \quad (3)$$

$$20 C_F \leq \lambda_{ij} \leq 120 \quad (4)$$

$$20 C_F \leq \lambda_{ij} \leq 200 \quad (5)$$

で与えられ、式(4)は圧縮部材、式(5)は引張部材に関する制約である。ところで目的関数、制約条件式はともに非線形であるので $A_0, k_{axij}, \lambda_{ij}$ を構造変数として、反復線形計画法(SLP)により解析を行なう。ここで添字 ij は (ij) 部材を表わす。式(2)～式(5)までも線形化すると。

圧縮部材については

$$\frac{\sigma_{ia}^{(i)}}{w_0 l_0} - \sigma_{ij}^{*ij} \leq \left(\frac{\partial \sigma_{ij}^{*ij}}{\partial X_i} \right) \Delta X_i^{(i)} - \left(\frac{\partial \sigma_{ia}^{(i)}}{\partial X_i} \right) \Delta X_i^{(i)} / w_0 l_0 \quad (6)$$

$$20CF - \lambda_{ij}^{(i)} \leq \left(\frac{\partial \lambda_{ij}^{(i)}}{\partial X_i} \right) \Delta X_i^{(i)} \leq 120 - \lambda_{ij}^{(i)} \quad (7)$$

引張部材については

$$\frac{\sigma_{ia}^{(i)}}{w_0 l_0} - \sigma_{ij}^{*ij} \geq \left(\frac{\partial \sigma_{ij}^{*ij}}{\partial X_i} \right) \Delta X_i^{(i)} \quad (8)$$

$$20CF - \lambda_{ij}^{(i)} \leq \left(\frac{\partial \lambda_{ij}^{(i)}}{\partial X_i} \right) \Delta X_i^{(i)} \leq 200 - \lambda_{ij}^{(i)} \quad (9)$$

となり、目的関数としては

$$\Delta Z = \left(\frac{\partial Z^{(i)}}{\partial A_0} \right) \Delta A_0^{(i)} + \sum_{ij} \left(\frac{\partial Z^{(i)}}{\partial k_{nij}} \right) \Delta k_{nij}^{(i)} \quad (10)$$

のようになる。全重量 \$Z\$ の変化量 \$\Delta Z\$ が 0 で近似できるようになるまで、構造変数 \$\Delta A_0^{(i)}\$, \$\Delta k_{nij}\$, \$\Delta \lambda_{ij}\$ を修正して行き、最適な構造変数の組 \$(A_0, k_{nij}, \lambda_{ij})\$ を求めることにより、\$Z\$ を求める。

以下に状態変数及び目的関数の感度係数を示す。

$$\begin{aligned} \frac{\partial \sigma_{ij}^*}{\partial X_i} &= \frac{\partial \sigma_{nij}^*}{\partial X_i} + \frac{\partial \sigma_{mij}^*}{\partial X_i} = B_N T_{ij} \left\{ \frac{d_{ij}^*}{k_{nij}} \left(\frac{\partial k_{ij}^*}{\partial X_i} \right) + \frac{k_{ij}^*}{k_{nij}} \left(\frac{\partial d_{ij}^*}{\partial X_i} \right) - \frac{k_{ij}^* d_{ij}^*}{k_{nij}^2} \left(\frac{\partial k_{nij}}{\partial X_i} \right) \right\} \\ &+ \frac{CF}{k_{eij}} B_M T_{ij} \left\{ \frac{k_{ij}^* d_{ij}^*}{k_{nij}} \left(\frac{\partial \lambda_{ij}}{\partial X_i} \right) - \frac{\lambda_{ij} k_{ij}^* d_{ij}^*}{k_{nij}^2} \left(\frac{\partial k_{nij}}{\partial X_i} \right) + \frac{\lambda_{ij} d_{ij}^*}{k_{nij}} \left(\frac{\partial k_{ij}^*}{\partial X_i} \right) + \frac{\lambda_{ij} k_{ij}^*}{k_{nij}} \left(\frac{\partial d_{ij}^*}{\partial X_i} \right) \right\} \quad (11) \\ &\therefore B_N = [000100] \quad B_M = [001000] \text{ or } [000001] \end{aligned}$$

ここで \$P^* = (P_0 + P) / P_0 = P_0^* + P / w_0 A_0 l_0 = P_0^* + P^*\$ とおく。

$$\frac{\partial d_{ij}^*}{\partial X_i} - \left\{ \left(\frac{\partial k^*}{\partial X_i} \right) P^* + k^* \left(\frac{\partial P^*}{\partial X_i} \right) \right\}_{ij} = \left\{ -k^{*-1} \frac{\partial k^*}{\partial X_i} k^{*-1} (P_0^* + P^*) + k^{*-1} \left(\frac{\partial P_0^*}{\partial X_i} + \frac{\partial P^*}{\partial X_i} \right) \right\} \quad (12)$$

式(10)から式(12)までの感度係数を表-1に示す。

表-1: 感度係数

変数	\$A_0\$	\$k_{nij}\$	\$\lambda_{ij}\$
\$\frac{\partial Z}{\partial X_i}\$	\$w_0 l_0 \{ 1 + \sum_{ij} k_{wij} k_{nij} k_{eij} \}\$	\$w_0 A_0 l_0 \{ k_{wij} \cdot k_{eij} \}\$	0
\$\frac{\partial P_0^*}{\partial X_i}\$	0	\$k_{wij} \cdot k_{eij}\$	0
\$\frac{\partial P^*}{\partial X_i}\$	\$-\frac{P}{w_0 \cdot A_0^2 \cdot l_0}\$	0	0
\$\frac{\partial k^*}{\partial X_i}\$	0	\$\left(\frac{\partial k_{ij}^*}{\partial k_{nij}} \right)'\$	\$\left(\frac{\partial k_{ij}^*}{\partial \lambda_{ij}} \right)\$
\$\frac{\partial \lambda_{ij}}{\partial X_i}\$	0	0	1 0
\$\frac{\partial k_{nij}}{\partial X_i}\$	0	1 0	0

* ダッシュ記号はマトリクスを構造全体の大きさに拡大することを意味する。

参考文献: 三池, 丸内, 小林 "最適無次元構造解析について(第2報)" 才31回年講概要集(工)